

バリ・ヒンドゥー教のサンスクリット 儀軌 Wedaparikrama 儀軌の概要および部分訳

著者	山口 しのぶ
著者別名	YAMAGUCHI Shinobu
雑誌名	東洋思想文化
巻	8
ページ	132(91)-112(111)
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.34428/00012651

バリ・ヒンドゥー教のサンスクリット

儀軌 *Wedaparikrama*

—儀軌の概要および部分訳—

山 口 しのぶ

1. はじめに

インドネシア、バリ島においては、インドおよびジャワから伝わったヒンドゥー教が信仰されている。バリ・ヒンドゥー教においては儀礼行為が重視され、寺院や家庭では年中行事や通過儀礼などが頻繁に行われるが、その際ヒンドゥー僧がサンスクリットや古ジャワ語で記述された儀軌にのっとりマントラを唱え儀礼行為を行う。このような儀礼においては、僧が聖水 (air suci) を作りだし儀礼の場や参加者を浄化する行為が特に重要と考えられる。筆者は2017年4月から翌年3月までバリに滞在し、複数のヒンドゥー儀礼を観察する機会を得たが、そのいずれにおいても聖水が使用され、儀礼に参加する信者たちにとっては僧侶から聖水をもらい自身を浄化することが第一の目的のようにも感じられた。

バリ・ヒンドゥー教において、このような聖水の制作と儀礼での使用、およびシヴァ神をはじめとする神々への礼拝を述べた儀軌に *Wedaparikrama*¹ (略号WP) がある。‘weda’とはサンスクリットの‘veda’のバリでの発音であるが、バリ・ヒンドゥー教において *Weda*-と名付けられたテキストは、インドのヴェーダ文献を意味するのではなく「儀礼や神秘的な文字からなる宗教文献の集成²」を指す。また‘parikrama’は古典サンスクリットでは「歩き回ること (roaming about)」「連続、ひ

¹ 古典サンスクリットでは *Vedaparikrama* であるが、現地では *Wedaparikrama* のスペルが一般的であり、本稿においても *Wedaparikrama* を使用する。

² (Gonda 1973 :190) の定義にしたがった。

と続き (series, succession)」を意味するが、この語に関しLévi (1933: XVIII) は、元来「礼拝 (worship)」を意味する‘parikarma’だったものがバリで変化したものと述べており、Gonda(1973: 189-190) もこの意見を支持している。

本儀軌の成立年代は明らかではないが、バリ・ヒンドゥーの僧侶が聖水を用いた日常の儀礼や通過儀礼の一部などで現在も用いられている。筆者は以前、その一部が本儀軌にしたがって行われた儀礼「バユ・オトン」(Bayuh Oton) のプロセスについて調査研究を行った³。

1933年、Sylvan Léviにより、*Sanskrit Texts from Bali* (G.O.S. No.67) がインドで出版された⁴。当該文献にはLéviがバリ島で写本を入手した複数の儀軌類や讃歌 (stotra) が収められているが⁵、その中にWPも含まれている⁶。また本儀軌はシヴァ神への讃歌を中心としたサンスクリットのマントラの記述が多くを占めるが、行為の手順の説明にはバリ語が用いられている。LéviはWPのタントラの要素を認め、インドのヒンドゥー・タントラ文献と比較対照しているが、WPにある‘Śivāditya (Śivāditya)’という語に着目し、シヴァ神とスーリヤ神 (Āditya) を組み合わせる一つの神とするような記述がインドのSandhyā儀礼のテキストには見当たらない、と述べている⁷。

またインドネシア人研究者G. Pujaも、WPの写本を用いてテキスト校訂およびインドネシア語訳と解説を行っている⁸。両者のWPテキストを比較すると、Pujaの校訂本のほうがLévi本より分量が多く、前者は後

³ (山口 2020)

⁴ 日本におけるバリのサンスクリット文献に関する先行研究では、小林 (2004) がLéviの当該文献について言及している。

⁵ (Lévi 1933) には、*Wedaparikrama* (表記は*Vedaparikrama*) 以外に*Caturveda*, *Buddhaveda*, *Caritrarāmāyaṇa*, またAgni, Yama, Bhairava等に対する讃歌 (stava, stotra) 類が収められている。

⁶ Léviはテキストをデーヴァナーガリー文字で出版している。

⁷ (Lévi 1933: XIX) Léviはインドのヒンドゥー・タントラとの比較対照において、*Īśānaśivagurudevapaddhati*, *Tattvasamucchaya*, *Paraśūrahmahalpa*の一部にWPと類似のマントラが存在することを指摘している。

⁸ (Puja 2007)

者にない歯磨きや沐浴といった最初の準備的行為も含んでいる。本稿においては、より詳細な儀礼の次第が述べられているPuja本の内容にしたがい、サンスクリットテキストWPの和訳（部分訳）を試みた。次節では、WPの構成について述べよう。

2. *Wedaparikrama*の構成と特色

以下（Puja 2007, Puja本）の内容にしたがって、その構成を述べたい。WPの構成は以下の表1のとおりである。

表1 <*Wedaparikrama*の構成>

* (Puja 2007) に基づく

1. 浄化の次第
 - 1.1 供養の準備
 - 1.2 儀礼用の衣服および装飾品の着用
2. 供物と身体の浄化
 - 2.1 供物の浄化
 - 2.2 身体の浄化
3. 儀礼用の聖水の準備
 - 3.1 カルピカ花の準備
 - 3.2 聖水の容器の準備
 - 3.3 聖水の容器への右繞と聖別
 - 3.4 閼伽水の浄化
 - 3.5 聖水（甘露）の制作
 - 3.6 蓮華の八葉への女神の布置
 - 3.7 クシャ草で作られたヘアバンド（śirowista）の聖水の容器（śiwāmba）への装着
4. 調息
5. シヴァ神の確立（Śiwīkaraṇa, Śivīkaraṇa）
 - 5.1 シヴァ・アートマンを身体の外に解き放つこと（Ngīlī Ātmā）
 - 5.2 穢れを焼き払うこと

- 5.3 [身体内部の] 秘密の火を消すこと
- 5.4 甘露を作り出すこと (amṛtakaraṇa)
- 5.5 ブラフマー神、シヴァ神の身体の部分としての手の浄化
- 5.6 シヴァ・アートマンをもとの場所 (心臓) に戻すこと
- 6. 神の安立
 - 6.1 甘露のマントラ、ムドラーによる賞讃
 - 6.2 鈴による賞讃
 - 6.3 ガンガー (ガンジス河) とシヴァ神への賞讃
- 7. *Sūrya Sevana*にしたがった聖水作り
- 8. 灰と装飾品を身につけること

上記の次第のうち最初の「1. 浄化の次第」は、これから儀礼をおこなうための準備的行為であり、儀礼執行者の僧侶はまずマントラを唱えて歯を磨き沐浴などを行う。次のプロセスでは儀礼用の衣服に着替え Santog と呼ばれる帯を締める。その後儀礼の場に着座し、マントラを唱えて座を浄化する。座の浄化の後、儀礼執行の際必要な数珠、首飾り、ブレスレット、聖紐などを身につけ、自身を浄化する。その後 Prasādakāśaiva、Sthitikāśaiva など14種の名称で呼ばれるシヴァ神への礼拝の句が唱えられる。

「2. 供物と身体の浄化」では、儀礼に使用される供物と僧侶の身体の浄化が行われる。ここでは、まず僧侶はマントラを唱え線香、灯明、食物などの供物を浄化し、さらにマントラを唱えながら世界の生起 (utpatthi) と維持 (stithi) に精神を集中し、その後「武器のマントラ」 (astramantra) を唱える。供物の浄化の後、僧はマントラを唱えて左右の手の指やその他の身体を浄化する。その後僧は「甘露のマントラ」を自身の宝冠に対して唱え、足を浄化する。

次のプロセスである「3. 儀礼用の聖水の準備」では、僧は最初にマントラを唱えて、kalpika と呼ばれる花を儀礼の場の四方四維と中央に布置する。その後、僧はブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ (ルドラ) に礼拝する旨のマントラを唱え、聖水の容器 (śiwāmba) を浄化する。続いて聖水の容器の聖別が行われ、僧は虚空の本質がシヴァであることをマ

ントラを唱えて確認し、容器を聖別する。次に、僧は闍伽水（供水）に対し、ガンガーと聖地のマントラを唱えて浄化する。

以上のプロセスの後、僧はam̐、um̐、mām̐の音からなるマントラを唱え、匙代わりにした花で容器の水にオーム字を描く。この行為が聖水（甘露）を作り出す行為である。その後聖水を花で右回りにかき混ぜ、聖水を完成させる。その後八葉蓮華にBrāhmī、Maheśvarīなど8名の女神⁹を布置するマントラを唱える。3のプロセスの結びとして、僧は聖水の容器にクシャ草からなるバンド（śirowista）を付け、邪悪なものを打ち払うことを願ってマントラを唱える。

次に「4. 調息」（prāṇāyāma）が行われる。WPの前半部分は聖水の制作に向けての記述が中心であるが、4のプロセス以降では瞑想（dhyāna）など精神的、内的な行為が述べられる。ここでは僧はヨーガにおける調息のクンバカ、レーチャカ、プーラカに対応するマントラを唱える。

次のプロセスは「5. シヴァ神の確立（Śivīkaraṇa, Śivīkaraṇa）」である。Śivīkaraṇaは、シヴァ神を僧の身体外部に運び出すための行為である。ここではまずシヴァ神に礼拝した後、僧の身体内部の心臓にいるシヴァのアートマンを僧身体の外に解き放つためのマントラが唱えられる。ここでシヴァは「シヴァの門」（śivadvāra、儀礼上は僧の被る宝冠）を通じて身体外部に出る。その後、身体全ての穢れを焼き払うマントラを唱える。ここでは身体がホーマの火炉、内官が段木、7つのオーム字が穢れや罪を焼き払う火と考えられ、その後身体の火炉にある「秘密の火」が消される。その後僧はマントラを唱え、再び甘露を作り出す。この5の次第においては、その後手の浄化と祖霊、曜（月曜から日曜）、9名のシャクティ（女神）などの布置が行われ、身体外部に出たシヴァ神が再び僧の心臓の蓮華へと戻されて終了する。

その後「6. 神の安立」の次第が続くが、Puja（2007：170）はこの6

⁹ ここではBrāhmī, Maheśvarī, Kaumārī, Vaiṣṇavī, Vārāhī, Indrāṇī, Cāmuṇḍī, Gaṇendrīの8名の女神が布置される。Gaṇendrī以外の7女神はインドでは「七母神（saptmātrikā）」として知られ、またネパールでは七母神にMahālakṣmīを加えた八母神（aṣṭamātrikā）が知られるが、ここでもGaṇendrīを加えた八母神が意識されていると思われる。

の次第がWPのハイライト (puncak upacara) であると述べている。ここでは僧は、これまでもWPで述べられてきた甘露のマントラ、神の安立 (praṭiṣṭhā) のマントラ、世界の生起と維持のマントラを唱えながら、alang-alangと呼ばれる草で水中にオーム字を書き、次いで「甘露のムドラー」を結びながら、ガンガーをたたえる文言を唱える。その後僧は花や塗香、米を供え、鈴を鳴らしながらシヴァ神に対し許しを乞う文言を唱え、さらに聖水による浄化のマントラ、6つのガンガーへの賞讃偈が続き、最後はシヴァ (mr̥tyumjaya) に対する一連の賞讃偈で終了する。

次のプロセスである「7. *Sūrya Sevana*にしたがった聖水作り」であるが、(Puja 2007) には記述があるが、(Lévi 1933) には記述がない。*Sūrya Sevana*に関しては、Hooykaas (1966) が詳細な解説、テキスト、英訳および儀礼行為のイラストレーションを出版している。(Puja 2007) における7のプロセスでは、WPの6までに既出の複数のマントラが唱えられ、聖水 (toya) の制作、バイラヴァのマントラによるアーディティヤ神の確立、前述の「5. シヴァ神の確立」の次第も述べられる。

最後のプロセスである「8. 灰と装飾品を身につけること」は (Lévi 1933) にも述べられている。ここでは僧はマントラを唱え、シヴァ派で使用される灰の準備や身体への塗布を行う。その後手の浄化を行い、数珠、イヤリングなど装飾品に対するマントラを唱えながら装飾品を身につけ、最後はWPに類出する武器のマントラと'tryantu'マントラ (om śreyo bhavatu, om sukham bhavatu, om pūrṇam bhavatu) が唱えられWPは終了する。

以上見てきたように、WPは聖水を儀礼的に作り出す行為が重要であるが、僧侶の心臓にあるシヴァ神を身体の外に引き出し穢れを焼き払う行為も見られ、ヨーガの要素を含み身体という場を利用した儀礼の内化、精神化が行われていることが明らかになった。

先に述べたように本儀軌の成立年代や成立過程に関してはまだ明らかでない。バリ・ヒンドゥー教はインドからの直接の影響、11世紀以降に顕著になってくるジャワの影響など、いくつかの異なったヒンドゥー教・仏教の伝播の波を経験しており、重層的な構造を持っていると考えられる。WPの成立過程に関しては、本儀軌が、インドから直接伝わったテ

キストをそのまま保持していた可能性、インドからの直接の影響でバリの僧侶により編纂された可能性、またはジャワからテキストが伝わってそのまま保持した可能性、あるいはジャワから伝わったヒンドゥー教の影響下で新たに編纂された可能性など、複数の可能性が考えられるが、この点に関しては今後の研究により明らかにしていきたい。

3. *Wedaparikrama*部分訳

本節においては、WPの和訳（部分訳）を試みた。以下の和訳は、上記表1の構成のうち、「4. 調息」までを含んでいる。和訳に際しては、Pujaのサンスクリット校訂テキスト（Puja 2007）を底本とし、適宜 Sylvan Léviの校訂テキスト（Lévi 1933）を参照した。またテキストの内容構成を番号で示したが、翻訳の必要上、先に挙げた表1の構成の各構成番号の下位に、さらに細目番号を付加している。

また和訳中に付したサンスクリットのアルファベット表記に関して、バリでは‘v’の表記が多くの場合‘w’になり（例えばveda→weda、Śiva→Śiwa）、底本とした（Puja 2007）もそれにしたがっていることに鑑み、あえて‘v’を‘w’のまま表記した。今回の和訳はWPの次第の4までであるが、「5. シヴァ神の確立」以降は別の機会に詳しく論じたい。

< *Wedaparikrama*部分訳 >

1. 浄化の次第

1.1 供養の準備¹⁰

1.1.1 歯を磨くこと

オーム、栄えある吉祥なる女神、バトリンサ（Bhatrimsa）¹¹よ、ヨーギニーへ礼拝する。

1.1.2 口漱ぎ

¹⁰ 1.1の部分は（Lévi 1933）には見られない。

¹¹（Hooykaas 1966 :132）によると、Bhatrimsaは櫛の女神とされる。

(98)

オーム、ウム、パト、武器に礼拝する。

1.1.3 洗顔

オーム、オーム、私の顔を浄化せよ。

1.1.4 沐浴

オーム、ガンガーの甘露よ、私の身体を浄化せよ。

1.1.5 衣装の着用

カウピーナ¹²(kaupīna) はブラフマーに結びついており、ガードルはヴィシュヌに結びつけられている。

[そのように] イーシュヴァラ（シヴァ）は下着と結びつく。サダーシヴァが[それを]結びつけるものであれ。

1.2 儀礼用の衣服および装飾品の着用

1.2.1 儀礼用の衣服の着用

オーム、タン、マハーデーヴァ（シヴァ）に礼拝する。

1.2.2 上衣（akampuh）と下半身の腰布（wawastra）の着用

オーム、アン、確固たるシヴァに礼拝する。

1.2.3 上衣の着用

オーム、ヴィシュヌ、サダーシヴァに礼拝する。

1.2.4 帯状の衣装（santog）の着用

オーム、マン、自在神よ、パラマシヴァに礼拝する。

1.2.5 座の用意

オーム、イーシャーナに礼拝する。オーム、ウム、ヴィシュヌに礼拝する。

¹² kaupīna とは古ジャワ語でヒンドゥー僧が下半身に着用する小布を指す。

1.2.6 足を洗うこと

オーム、アン、カ、カ、自在神に礼拝する¹³。

1.2.7 手を洗うこと（武器のマントラ）

オーム、フラハ（hrah）、武器（astra）に礼拝する。

1.2.8 口漱ぎ

オーム、ウム、フラハ、パト（phaṭ）、武器に礼拝する。

1.2.9 儀礼の場に坐すこと

オーム、オーム、蓮華座に礼拝する。

1.2.10 身体のためのマントラおよび座の浄化

オーム、清らかな身体よ、清浄で汚れなきシヴァに礼拝する。

1.2.11 数珠の着用¹⁴

1.2.11.1 儀礼に使用される数珠（akṣamālā）の準備

オーム、クシャン（kṣaṃ）、ウム、アン、礼拝する。

1.2.11.2 敬意を表わすマントラ

オーム、フラム、フリム、サハ、太陽であるパラマシヴァに礼拝する。

1.2.11.3 guduha（装飾品の一種）の着用

オーム、オーム、パラマシヴァよ、美しい姿を持つ者に礼拝する。

1.2.12 髪飾りの着用

オーム、シヴァ＝ルドラに礼拝する。

¹³ (Lévi 1933 : 7) No.5の マントラを採用した。(Puja 2007 : 65) のNo.11では khaṣolkāyaとなっている。

¹⁴ 1.2.11から1.2.22 14種のシヴァへの礼拝までは (Lévi 1933) には無い。

(100)

1.2.13 顔の飾りの着用

オーム、サラスヴァティーに礼拝する。

1.2.14 イヤリングを付けること

オーム、勇猛なるリングに礼拝する。

1.2.15 自身の浄化

オーム、一切のシヴァに礼拝する。

1.2.16 首飾り

数珠 (akṣamālā) はブラフマーであり、ルドラはネックレスである。
髪を分けるすじ (rekḥaya) はインドラであり、眼は月と日である。

1.2.17 聖紐の着用

湿り気 (kleda) はガナパティ神であり、亀裂 (vivara) はヴァーユである。
糸 (sūtra) は蛇王 (nāgarāja) であり、このように 8 名の神々が知られる。

1.2.18 手の飾り (hastabharāṇa) の着用

オーム、栄えある者、世間主であり、世界の主、強力で偉大な勇気を持つ者、青色で、四臂を持つ者に礼拝する。

1.2.19 指輪の着用

オーム、プワ (pwa)、美しい姿を持つ者 (シヴァ) に礼拝する。

1.2.20 樹皮 (valkāla) で作った衣服の着用

樹皮は非常に神聖であり、清浄であり、罪を消滅させる。

1.2.21 数珠 (ganitri) の着用

オーム、フラン (hram̐)、マ (ma)、真言の読誦 (japa) を受け取られよ。真実の目的 [の成就] を与えよ。

オーム、フラン、マ、禪定 (dhyāna) を受け取られよ。真実の目的 [の

成就] を与えよ。

オーム、フラン、マ、ヨーガを受け取られよ。真実の目的 [の成就] を与えよ。

1.2.22 14種のシヴァ¹⁵への礼拝（全ての衣服、装飾品の着用の完成）

- (1) オーム、アン、輝かしいカーラ・シヴァに礼拝する。(右足)
- (2) オーム、アン、確固たるカーラ・シヴァに礼拝する。(左足)
- (3) オーム、アン、毒 (kālakūṭa) [を飲む] シヴァへ礼拝する。(腹)
- (4) オーム、アン、偉大なる微細なシヴァに礼拝する。(臍)
- (5) オーム、アン、微細なるシヴァに礼拝する。(肝臓)
- (6) オーム、アン、終末のシヴァ (antakāśiwa) に礼拝する。(右手)
- (7) オーム、アン、未来を司るシヴァ (adhikāśiwa) に礼拝する。(左手)
- (8) オーム、アン、微細なるパラマシヴァ (sūkṣmaparamaśiwa) に礼拝する。(右目)
- (9) オーム、アン、非常に微細なシヴァ (atisūkṣmaśiwa) に礼拝する。(左目)
- (10) オーム、アン、より微細なシヴァ (sūkṣmataraśiwa) に礼拝する。(右耳)
- (11) オーム、アン、最も微細なシヴァ (sūkṣmatamaśiwa) に礼拝する。(左耳)
- (12) オーム、アン、サダーシヴァに礼拝する。(眉間)
- (13) オーム、アン、パラマシヴァに礼拝する。(鼻先)
- (14) オーム、アン、空なるシヴァ (śūnyaśiwa) へ、シヴァに礼拝する。(頭からつま先まで)

2. 供物と身体の浄化

2.1 供物の浄化

2.1.1 線香と灯明の浄化

オーム、アン、線香と灯明という武器に礼拝する¹⁶。

¹⁵ Puja (2007:76) はこの14種のシヴァはブダンダ僧に力を与えるサン・ヒャン・ウィディ・ワサの性格を示すという。

2.1.2 供物としての施食 (suguhan) の蓋を開けること

オーム、イム、自在神 (シヴァ) よ、確固たる智の姿をとる者に礼拝する。

2.1.3 世界の生起 (Utpatti) と世界の維持 (Sthiti) に精神を集中すること

(Utpatti¹⁷) オーム、イ、バ、サ、タ、ア、オーム、ヤ、ナ、マ、シ、ワ、
オーム、マン、ウン、アン

(Sthiti) オーム、サ、バ、タ、ア、イ、オーム、ヤ、ナ、マ、シ、ヴァ、
ヤ、オーム、アン、ウン、マン。

2.1.4 武器のマントラ (astramantra)

オーム、ウム、ラハ、パト、武器に礼拝する。

オーム、アートマンの本質よ、アートマンは、私を浄化せよ、スヴァーハー。

オーム、オーム、忍耐 (kṣamā) を満たす者に礼拝する、スヴァーハー。

オーム、栄えなるパシュパティに、フン、パト。

2.1.5 印のためのマントラ (mudrāmantra)

(武器のマントラ)

オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。

オーム、アートマンの本質よ、アートマンは、私を浄化せよ、スヴァーハー。

オーム、オーム、忍耐を満たす者に礼拝する、スヴァーハー。

矢 (nārāca) の印に礼拝する。

オーム、バン、眼に礼拝する。(右目)

オーム、バン、眼に礼拝する。(左目)

オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。

¹⁶ (Lévi 1933 : 8) では om am brahma amṛtadīpāya namaḥ. om am um viṣṇu amṛtadīpāya namaḥ. om am liṅgapuruṣāya namaḥとなっている。

¹⁷ この部分は (Lévi 1933) には無い。

甘露印に礼拝する。(心臓)

オーム、Sadyojāta (=シヴァ) に礼拝する。

オーム、フルン、鎧 (kavaca) に礼拝する。

顕れる者に敬礼する。

オーム、アグニ・ルドラに礼拝する。

2.1.6 他の供物（食物）を聖化するマントラと印

オーム、グリーン (grīṃ)、ヴァウシャト (vauṣat)、忍耐をなす者 (サダーシヴァ) に礼拝する、スヴァーハー。

2.2 身体の聖化

2.2.1 手の浄化 (karaśodhana)

(右手のマントラ)

オーム、イン、礼拝する。(親指)

オーム、タン、礼拝する。(人差し指)

オーム、アン、礼拝する。(中指)

オーム、バン、礼拝する。(薬指)

オーム、サン、礼拝する。(小指)

(左手のマントラ)

オーム、ハン、心臓に、礼拝する。(親指)

オーム、リン、身体と頭に、礼拝する。(人差し指)

オーム、ブル、ブヴァハ、スヴァハ、燃えさかる髪に礼拝する。(中指)

オーム、フルン、鎧に、礼拝する。(薬指)

オーム、バン、眼に礼拝する。(小指)

オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。(武器のマントラ)

2.2.2 最高のマントラ (kūṭamantra)

オーム、フラーン、フリーン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに礼拝する。

2.2.3 南西の方角に花を投げること

オーム、チョン、畏怖すべき自在神に礼拝する。

2.2.4 合掌

オーム、確立せる者 (sādhya) に礼拝する。

2.2.5 アムリタ・ムドラー (合掌)

オーム、フラーン、フリーン、サハ、最高のシヴァの甘露に礼拝する。

2.2.6 鎧のマントラ (kavacamantra)

オーム、フルーム、鎧に礼拝する。

2.2.7 フリダヤ・ムドラー

オーム、ホーマの段木に礼拝する。

2.2.8 加持のムドラー

オーム、アグニ=ルドラに礼拝する。

2.2.9 結びの文言

オーム、繁栄あれ。オーム、満足あれ。オーム、幸いあれ。

3. 儀礼用の聖水の準備

3.1 カルピカ花の準備

3.1.1 カルピカ花の四方四維と中央への布置

オーム、サン、礼拝する (東)。オーム、バン、礼拝する (南)。オーム、タン、礼拝する (西)。オーム、アン、礼拝する (北)。オーム、イン、礼拝する (中央)。

オーム、ナン、礼拝する (南東)。オーム、マーン、礼拝する (南西)。オーム、シン、礼拝する (北西)。オーム、ワン、礼拝する (北東)。オーム、ヤン、礼拝する (中央)。

3.1.2 3つの意識 (antaḥkaraṇa) と3種の種子マントラ

オーム、アン、ウン、マーン¹⁸。

3.1.3 最高のマントラ

オーム、フリーン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに礼拝する。

3.2 聖水の容器¹⁹ (tripāda) の準備

3.2.1 聖水の容器の準備、加持のマントラ

オーム、オーム、安立せる神に礼拝する。

3.2.2 聖水の容器へのマントラ

オーム、アン、日輪よ、主ブラフマーに礼拝する。(容器の南側の脚)

オーム、ウン、9つの智である月輪よ、主ヴィシュヌに礼拝する。(容器の北側の脚)

オーム、マーン、火輪よ、主ルドラに礼拝する。(容器の東側の脚)

オーム、マーン、礼拝する。オーム、ウン、礼拝する。オーム、アン、礼拝する。

3.2.3 結びの行為としての矢の印と武器のマントラ

この箇所にはPujaの校訂本にもLéviの校訂本にも具体的なマントラは述べられておらず、ここでは前述の「武器のマントラ」が唱えられるのみ述べられる。

3.3 聖水の容器 (śiwāmba) への右繞と聖別

3.3.1 聖水の容器に対する右繞、武器のマントラ

オーム、オーム、礼拝する。オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。

3.3.2 虚空の本質²⁰ (ākāśatattva)

¹⁸ Puja (2007 : 101) は、この3種をそれぞれĪśvara, Viṣṇu, Brahmāへのマントラとしている。

¹⁹ バリ・ヒンドゥーの儀礼で聖水を入れておく三脚を備えた容器を指す。

オーム、オーム、虚空よ、虚空であるシヴァの本質に礼拝する。

3.3.3 灯明への右繞

オーム、オーム、サダーシヴァに礼拝する。オーム、オーム、サダー
ルドラに礼拝する。オーム、オーム、マハーデーヴァに礼拝する。オー
ム、マーン、イーシュヴァラに礼拝する。オーム、ウン、ヴィシュヌに
礼拝する。オーム、アン、ブラフマーに礼拝する。

3.3.4 地の本質 (prthvī tattva)

オーム、オーム、プリティヴィー、光り輝く女神の本質に礼拝する。

3.4 閼伽水の浄化 (arghaśuddha)

3.4.1 水による閼伽水の浄化²¹、武器のマントラ

オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。

3.4.2 十種子のマントラ

オーム、マーン、イーシュヴァラに礼拝する。

サン、ヴァン、タン、アン、イン、ナン、マーン、シン、ヴァン、ヤ
ン。

3.4.3 両手で閼伽水の蓋をすること (鎧のマントラ)

オーム、フルーム、鎧に礼拝する。(鎧の印を結ぶ)

3.4.4 一度蓋を開けてまた閉じること

アン、ウン、マーン、アン、アハ²²。

3.5 聖水 (甘露) の制作

²⁰ (Puja 2007 : 104) によれば、ここでは僧侶は聖化した聖水の容器 (siwāmba) を持ち、灯明にかざす。灯明はエーテルと虚空の象徴であり、聖水の容器はこの「虚空の tattva」のマントラを唱えている間シヴァの本質となるとされる。

²¹ (Puja 2007 : 106) (Lévi 1933 : 11) によれば、ここでは閼伽水を線香の煙でいぶしながら浄化するという。

3.5.1 9つのガンガーと8つの聖地の文言（閼伽水にさらに水を注いで満たすこと）

オーム、フラーン、フリーン、サハ、最高のシヴァ、ガンガーよ。多くの甘露が流れる〔河〕に礼拝する。

オーム、サン、ナルマダー河に礼拝する。オーム、サン、シンドゥ河に礼拝する。

オーム、サン、ガンジス河に礼拝する。オーム、サハ、サラスヴァティー河に礼拝する。

オーム、サン、アイラーヴァティー河に礼拝する。オーム、サン、最高の河に礼拝する。

オーム、サン、注ぐ河に礼拝する。オーム、サン、源より生ずるものに礼拝する。

3.5.2 最高のマントラ

オーム、フラーン、フリーン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに礼拝する。

3.5.3 塗香と生米のマントラ (gandha-akṣata mantra)

オーム、シヴァの甘露に礼拝する、スヴァーハー。

3.5.4 三神へのマントラ²³（聖水（甘露）を作るプロセス、花で水に書く）

オーム、アン、礼拝する（南）。オーム、ウン、礼拝する（北）。オーム、マーン、礼拝する（中央）。

3.5.5 imの字を書いて完成させること²⁴

オーム、イン、礼拝する。

3.5.6 聖水を右回りにかき混ぜること

オーム、フラーン、フリーン、サハ、偉大なるパラマシヴァに礼拝す

²² am, aḥは、(puja 2007: 106) によればそれぞれ生と死を意味するという。

²³ (Lévi 1933: 11) では、maṃ (東), am (南), maṃ (北), im (北から南)となっている。

る。

3.5.7 結び

(Puja 2007 : 111) の説明では、「このプロセスの結びにあたって、聖なる偈を花、塗香、米、線香、灯明で完成させる」とあり、具体的な文言は見られない。

3.6 蓮華の八葉への女神の布置

3.6.1 偉大なる蓮華のマントラ

オーム、ブラーフミー女神よ、坐せ（東）。オーム、マーハーシュヴァリー女神よ、坐せ（南）。オーム、カウマリー女神よ、坐せ（北）。オーム、ヴァイシュナヴィー女神よ、坐せ（西）。オーム、ヴァーラーヒー女神よ、坐せ（南東）。オーム、インドラーニー女神よ、坐せ（北東）。オーム、チャームンディー女神²⁵よ、坐せ（南西）。オーム、ガネンドリー女神²⁶よ、坐せ（北西）。

3.6.2 最高のマントラ

オーム、フラーン、フリーン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに礼拝する、スヴァーハー。

3.7 クシャ草で作られたヘアバンド (śirowista) の聖水の容器 (śiwāmba) への装着

3.7.1 聖水の容器にśirowistaを付けること

śirowistaは大いに神聖であり、清浄であり、罪を滅するものである。

常にクシャ草の先端のごとく鋭く坐す。そのような [śirowistaを] 受け取れ。

3.7.2 武器のマントラ

²⁴ (Lévi 1933: 11) では、“om hṛiṃ vaṣaṭ paramaśivāmṛtāya namaḥ”となっている。

²⁵ インドでは ‘cāmuṇḍā’ であるが、ここでは (Puja 2007 : 111) の ‘cāmuṇḍī’ を採る。

オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。

3.7.3 3種のマンダラ²⁷

オーム、イン、フリーン、シュリー、クレン、アシュラ、フン、
12のカラー²⁸を本質とする者、サットヴァとラジャスである主に礼拝する。

オーム、アグニ・マンダラに、スヴァーハー。

オーム、イン、フリーン、シュリン、クレン、アシュラ、フン、
12のカラーを本質とし、サットヴァとタマスである主に礼拝する。

オーム、スーリヤ・マンダラ（日輪）に、スヴァーハー。

オーム、イン、フリーン、シュリン、クレン、アシュラ、フン、
12のカラーを本質とし、サットヴァを本質とする主に礼拝する。

オーム、ソーマ・マンダラ（月輪）に、スヴァーハー。

3.7.4 3種の本質 (tritattva)

オーム、オーム、シヴァを本質とする者に礼拝する。

オーム、オーム、知 (vidyā) を本質とする者に礼拝する。

オーム、オーム、アートマンを本質とする者に礼拝する。

²⁶ (Puja 2007 : 111) では 'gamendri' となっているが (Lévi 1933 : 11) の 'gaṇendri' (gaṇaの女主人) を採る。

²⁷ (Puja 2007 : 115) によれば、「3種のマンダラ」とは sūryamaṇḍala, agnimaṇḍala, candramaṇḍalaとされる。また (Lévi 1933 : 13) によれば、ここでは3種のマンダラを閼伽水の下におく行為がなされる。

²⁸ (バンダルカル 1984:391-392) によれば、ヴィーラ・シヴァ派において (1)パーヴァ・リング、(2)プラナ・リング、(3)イシュタ・リングという三種のリングがあり、それぞれ魂、生命、男根に相当するが、儀軌（プラヨーガ）、呪文（マントラ）、行為（クリヤー）によって限定されるとそれぞれカラー（kalā、力）、ナーダ（音）ビンドゥ（滴、精液）を形成するという。また（バンダルカル 1984:420）ではシャクティ派の教理が示される。そこにおいては合一したシヴァとシャクティが複合したビンドゥを形成し、それは女性エネルギーと男性エネルギーの結合（カーマ、愛欲）である。さらに赤白2種の滴があり、これら2種がカラー（産出エネルギー）を形成する。

3.7.5 武器のマントラ

オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する。

オーム、真実を本質とするアートマンは、私を浄化せよ、スヴァーハー。

オーム、忍耐を満たす者に礼拝する、スヴァーハー。

3.7.6 主（シヴァ神）への言葉（śabdabhattāra）

オーム、繁栄あれ。オーム、満足あれ。オーム、幸いあれ。

4. 調息（prāṇāyāma）

4.1 調息

オーム、アン。（クンバカ） オーム、ウン。（プーラカ） オーム、マーン。（レーチャカ）

4.2 第一（高次）の調息

オーム、アン、ブラフマーの姿をとるアートマンに礼拝する。（レーチャカ）

オーム、ウン、ヴィシュヌの姿をとる内なるアートマンに礼拝する。（プーラカ）

オーム、マーン、イーシュヴァラの姿をとる最高のアートマンに礼拝する。（クンバカ）

（以上）

参考文献

小林信彦 2004 「バリ島に伝わるサンスクリット文献：呪文として用いられる異文化のテキスト (1)」『桃山学院大学総合研究所紀要』29(3), 147-158.

バンダルカル, ラーマクリシュナ G. 1984 『ヒンドゥー教 ヴィシュヌとシヴァの宗教』（島岩、池田健太郎訳）せりか書房.

山口しのぶ 2020 「バリ・ヒンドゥー教のバユ・オトン儀礼について」『東洋思想文化』7: 86(61)-65(82)

Gonda, J. 1973 *Sanskrit in Indonesia*. Śatapiṭaka Series, Indo-Asian Literature, Vol.99, International Academy of Indian Culture and Aditya Prakasha, New Dehli.

- Hooykaas, C. 1966 *Sūrya-Sevana, The Way to God of a Balinese Śiva Priest*.
N.V.Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij, Amsterdam.
- Lévi, Sylvain 1933 *Sanskrit Texts from Bāli*. G.O.S No.67, Gaekwad Oriental
Institute, Baroda.
- Puja, G. 2007 *Wedaparikrama Satu Himpunan Naskah Mantra dan Stotra
Teks Asli Bahasa Sansekerta dan Penjelasannya*. Paramita, Surabaya.

【謝辞】 本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）19K00064の助成を受けた
ものです。This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number
JP 19K00064.